



2008 年 (平成 20 年)
4 月号 (No. 755)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成19年度第2回通常総会開催	1
平成20年度事業計画	2
平成20年度収支予算書	3
チベットのチョモランマ聖火リレー	4
公益活動を重視した07年の指導委員会	6
東西南北	8
カイルス山は未踏峰のまま残れるか	
明治40年、柴崎測量官の剣岳登頂日	
もう一つの白頭山	
三角点の向きについて	
韓国山岳会の英語表記はなぜ「CAC」なのか	
NASO GOLDEN AWARD 2006	
活動報告	12
集会委員会/自然保護・科学委員会/	
アルパインスキークラブ	
支部だより	14
北海道/千葉/福岡	
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
図書受入報告	17
INFORMATION	18

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

平成19年度第2回通常総会開催

吉永英明

平成19年度第2回通常総会が3月22日開催され、平成20年度事業計画(案)と収支予算(案)が出席者106名、委任状出席2996名を得て慎重審議が行なわれ、両案とも原案通り承認された。

定足数確認の後、開会に当たって宮下会長より「第1回日中韓学生交流登山」が実施されたこと、公益法人改革への対応、会員全員の支部員化を目指すことなどを内容とする挨拶があり、定款に従って会長を議長として審議に入った。

平成20年度事業計画(案)は、平成20年12月より公益法人改革法が施行されることから、前年度ま

で使ってきた「公益事業」という言い方を改革法に合わせて「公益目的事業」に変え、「登山に関する文化・学術の振興事業」、「児童・青少年の育成事業」、「スポーツ及び登山に関する教育・啓蒙事業」、「山岳環境保全事業」ほかの6つの事業に明確化した。近い将来、「公益社団法人」「一般社団法人」のいずれを選択するにしても、「公益目的事業」をある程度実施せざるを得なくなることに対応したものである。

「公益目的事業」はそれぞれの支部において地域と密着して活発に実施されているが、今後は首都圏

においても実施していかざるを得ない状況である。一方、本会にとっては会員のための事業である「公益事業」も重要であり、ほぼ例年通り「年次晩餐会」「全国支部懇談会」のほか各種の集会、イベントが計画されている。

平成20年度収支予算(案)は、会員減少傾向がみられる昨今の状況を考慮し、「基礎的収支の均衡」、即ち当該年度の支出を当該年度の収入で賄うこと、平成20年2月までの実績を勘案すること、受益者負担を原則とすることを基本的な方針として編成されたものである。厳しい財務状況を反映して事業活動支出が前年度比マイナス4・2

割となっており、特に事業費が前年度比同額であるのに対し、管理費はマイナス6・4割とより経費

節減の姿勢を明確にしている。

両案が原案通り承認された後、いったん総会の議事を閉じ、その後、執行部より東アジア三国学生の登山を通しての交流を目指した「第1回日中韓学生交流登山」の発足経緯と実施状況、今年度の計画(韓国山岳会が担当し、本年8月下旬、岩登りを中心とした計画が進行中)についての報告があり、続いて一般の公益法人改革の概要説明があった。「公益社団法人」「一般社団法人」のいずれに移行するにしても、程度の差こそあれ「公益目的事業」の実施が義務づけられ、相当複雑な作業を強いられることが予想される。

審議等が終了した後は恒例の懇親会に移り、和やかな懇談が続けられ、滞りなく総会を終了した。

7月	白山登山道整備事業 (石川)
7月中旬	高山植物盗掘防止パトロール (青森)
7月中旬	高山植物植生調査 (山形)
7月～8月	グリーンパトロール (信濃)
9月23日	ブナ苗木移植 (岩手)
10月中旬	九重山系標識等の設置・補修、木道点検・修理 (東九州)
通年	高尾の森づくり (自然保護)
〃	森林保全巡視活動 (北九州)
〃	大山頂上の保護事業 (山陰)
〃	猿投の森づくり (東海)

(6) 国際交流事業

5月9日	ヒラリー・鄧追悼講演会・映画会 (海外)
10月	ヒマラヤの集い (栃木)
通年	日中韓学生交流登山の準備 (学生)

(7) その他目的を達成するための事業

- ※山岳遭難の予防と対策に関する関係団体との協議
- ※国内関係団体 (日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本山岳文化学会) との連携
- ※海外登山団体との情報交換及び機関誌の交換等
- ※国内博物館・美術館との提携
- ※「上高地山岳研究所」の運用
- ※登山記録等の保存・整備

2. 会員のための事業 (共益事業)

(1) 登山、集会、施設の運用等

4月	上高地山研開所 (山研)
5月	第18回山を語る (図書)
5月	春の熊野古道 (集会)
5月	学生部所属大学山岳部新入部員歓迎会 (学生)
5月	新入会員のための徳本峠越えとウェストン祭 (山研)
8月	北アルプスを歩く (集会)
9月	オータムコンサート (山研)
9月	第13回古道を歩く (図書)
10月	紅葉山行 (奈良 集会)
10月	第24回全国支部懇談会 (平尾台 北九州)
10月	新入会員オリエンテーション (総務)
10月	クライミング集会 (学生)
11月	上高地山研開所 (山研)
11月	第37回山岳史懇談会 (図書)
11月	学生部所属大学山岳部マラソン大会 (学生)
12月6日	平成20年度年次晩餐会 (高輪プリンスホテル 総務)
12月7日	晩餐会記念山行 (集会)
12月30日	上高地山研冬季開所 (山研)
1月	タスマニア登山 (集会)
1月	スキー懇親会 (桐池 集会)
1月	第39回山岳図書を語る夕べ (図書)
3月	第26回図書交換会 (図書)

(2) 海外登山等

- ※第10次インド・ヒマラヤ登山隊の派遣準備 (東海)

(3) 会議等

- ※通常総会の開催 (5月17日・平成21年3月)
- ※理事会の開催 (11回)
- ※常務理事会の開催 (11回)
- ※支部長会議 (5月・9月・12月)
- ※支部事務局担当者会議の開催 (2月)
- ※評議員会の開催 (随時)

(社)日本山岳会 平成20年度事業計画 (主な事業)

平成20年4月1日～平成21年3月31日

1. 公益目的事業

(1) 登山に関する文化・学術の振興事業

4月	今西錦司賞 (京都・岐阜)
4月～11月	ミニ水力発電装置運用 (山岳研究所運営)
5月	英文ジャーナル (Japanese Alpine News Vol.9) の発行
5月31～6月1日	ウェストン祭 (上高地・信濃)
6月15日	講演会「地図読みについて」(茨城)
7月5日	第4回山の博覧会 (山梨)
10月	全国山岳博物館等連絡会議 (資料・映像)
12月	第10回秋父宮記念山岳賞
12月	「山岳」103 (2008) 年の発行 (山岳編集)
通年	会報「山」755号～766号の発行
〃	アラスカ・マッキンリー峰気象観測 (科学)
〃	図書室の整備・研究 (図書管理・図書)
〃	登山資料・山岳絵画の整備 (資料・映像)

(2) 児童・青少年の育成事業

7月21日	青少年体験登山大会 (東九州)
7月下旬	第9回自然児学校 (北海道)
7月下旬	少年少女登山教室 (青森)
8月	子供登山教室 (宮崎)
8月	子供自然教室 (京都)
年4回	宮崎家庭裁判所少年補導委託登山 (宮崎)
8月9日～10日	白山親子登山 (福井)
10月26日	第15回視覚障害者支援登山大会 (東九州)
11月	雪山の安全登山教室 (京都)
秋	親と子のふれあい登山教室 (東海)
〃	スペシャルオリンピックス、知的障害児との登山 (東海)

(3) スポーツ及び登山に関する教育・啓蒙事業

春～夏	初心者登山教室 (静岡)
5月中旬	JAC会員と一緒に登ろう (山形)
7月13日	市民登山 (岩手)
10月上旬	JAC会員と一緒に登ろう (山形)
～11月	四国分水嶺踏査 (関西)
2月	海外登山助成金の交付
通年	中国新聞「登山講座」(広島)
〃	中日文化センター登山教室 (東海)
〃	NHK文化センター春期登山教室 (東海)

(4) 事故防止事業

10月	講習会「山岳遭難救助の実際」(指導)
11月	救急救命法講習会 (指導)
11月	雪崩講習会 (机上) (指導)
秋	講演会「山での道迷い」(医療)
秋	講演会「高所登山における突然死を考える」(医療)
2月	県警察山岳救助指導者講習 (宮城)

(5) 山岳環境保全事業

1月～4月	山岳環境保護・保全調査 (山形)
3月～11月	権現の森林づくり (岐阜)
4月19日～20日	自然保護全国集会 (自然保護)
4月23日～5月13日	ヒマラヤ環境調査トレッキング隊 (自然保護・科学)
4月～9月	登山道の整備 (福島)
5月～11月	森林パトロール (岐阜)
6月	白神山地ブナ林再生事業 (青森)
6月上旬	支笏湖周辺復興の森づくり (北海道)
6月～8月	山岳レインジャー活動 (山梨)

平成20年度収支予算書

平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

科 目	平成20年度予算額	前年度予算額	増 減	備考
2. 事業活動支出				
事業費				
出版事業費	11,150,000	11,000,000	150,000	
図書管理事業費	200,000	200,000	0	
調査研究事業費	2,800,000	2,020,000	780,000	
指導研究事業費	490,000	750,000	-260,000	
支部事業費	10,000,000	10,000,000	0	
海外事業費	150,000	170,000	-20,000	
山岳研究所事業費	1,580,000	1,580,000	0	
山岳研究所管理費	2,560,000	2,560,000	0	
ミニ水力発電運営費	150,000	200,000	-50,000	
海外登山補助費	1,500,000	2,000,000	-500,000	
その他事業費	9,300,000	9,900,000	-600,000	
印刷・製本費	500,000	0	500,000	
刊行物発送費	4,200,000	4,200,000	0	
事業費計	44,580,000	44,580,000	0	
管理費				
給料手当	12,000,000	13,000,000	-1,000,000	
文具消耗品費	100,000	100,000	0	
印刷製本費	1,250,000	1,250,000	0	
旅費交通費	500,000	800,000	-300,000	
通信運搬費	800,000	800,000	0	
火災保険料	180,000	180,000	0	
修繕費	100,000	100,000	0	
租税公課	650,000	650,000	0	
光熱水道料	650,000	650,000	0	
電話料	320,000	320,000	0	
会議費	50,000	50,000	0	
什器備品費	100,000	100,000	0	
振替手数料	800,000	750,000	50,000	
福利厚生費	2,000,000	1,850,000	150,000	
事務所管理費	1,240,000	1,240,000	0	
その他管理費	1,800,000	2,500,000	-700,000	
負担金	50,000	60,000	-10,000	
賃借料	3,240,000	3,240,000	0	
雑費	600,000	600,000	0	
管理費計	26,430,000	28,240,000	-1,810,000	
特定預金支出				
長期計画積立金支出	0	0	0	
秩父宮記念賞基金支出	0	1,000,000	-1,000,000	
海外登山基金支出	0	0	0	
終身会費積立金支出	500,000	800,000	-300,000	
退職給与引当預金支出	0	0	0	
特定預金支出計	500,000	1,800,000	-1,300,000	
事業活動支出計	71,510,000	74,620,000	-3,110,000	
事業活動収支差額	1,600,000	-188,000	1,788,000	

科 目	平成20年度予算額	前年度予算額	増 減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入				
基本財産利息収入	10,000	2,000	8,000	
会費・入会金収入				
入会金収入	2,200,000	3,000,000	-800,000	
通常会費収入	61,000,000	60,000,000	1,000,000	
終身会費収入	500,000	800,000	-300,000	
会費・入会金収入計	63,700,000	63,800,000	-100,000	
事業収入				
広告料収入	1,600,000	1,600,000	0	
印税収入	0	0	0	
刊行物売上収入	300,000	300,000	0	
山研使用料収入	2,500,000	2,500,000	0	
その他事業収入	2,000,000	2,500,000	-500,000	
事業収入計	6,400,000	6,900,000	-500,000	
補助金等収入				
補助金収入	1,500,000	3,000,000	-1,500,000	
寄付金収入				
寄付金収入	0	0	0	
雑収入				
受取利息	300,000	30,000	270,000	
雑収入	1,200,000	700,000	500,000	
雑収入計	1,500,000	730,000	770,000	
事業活動収入計	73,110,000	74,432,000	-1,322,000	

科 目	平成20年度予算額	前年度予算額	増 減	備考
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	1,500,000	2,000,000	-500,000	
当期収支差額	100,000	-2,188,000	2,288,000	
繰越収支差額	7,065,283	9,253,283	-2,188,000	
次期繰越収支差額	7,165,283	7,065,283	100,000	

チベット問題とチヨモランマ聖火リレー

江本嘉伸

エヴェレストの登山史のなかで、2008年春は、特別な政治的困難を伴った季節として記憶されるだろう。8月8日に開会する予定の北京オリンピック。国家の威信をかけたこの大きなイベントを盛り上げようと計画されたチヨモランマ聖火リレーだったが、世界中の関心はラサはじめ各地で立ち上がったチベット人たちの命がけの抗議行動に集中した。チヨモランマとは別に、世界の都市を走りつなぐ「本来の聖火リレー」へのさまざまな妨害事件が発生、平和な祭典の雰囲気とはほど遠いものとなった。同時にそれは登山者ひとりひとりにチベット問題とは何かをつきつけているように思われる。

チヨモランマ聖火リレー

聖火リレーの計画は2003年に発表され、当初はネパール側から縦走するコースが考えられたが、

その後中国国内だけで完結するかたちに変更された。強風に加えて低温、低酸素の環境でトーチに火をともし続けることができるか、07年には実際頂上でのテストまで行なわれた。最終的には頂上で点火するのではなく、直下の岩場で点火、数人がリレーする方式になるようだ。映像に動きを加え、より感動的なイベントにしようというねらいだろう。

総勢50名から成る中国の聖火リレー登山隊は4月3日、ベースキャンプから6400mの前進ベースキャンプへ移動を開始。すでにノース・コルへのルートはルートワークされ、固定ロープが張られており、数百のポーターが間もなく荷揚げに動き出す予定という。聖火リレーの模様を中継する中国中央テレビのスタッフ（なんと86名の大部隊！）もすでにベースキャンプに入り、今後上部4カ所の中に

継カメラを据えて世界に画像を送る計画だ。

聖火リレー登山隊は3回登頂隊を出す計画を立てているという。第一次隊は4月28日に8300m^{トール}の最終キャンプから頂上を目指す。山頂で特殊な防風装置を施したトーチに点火、それをかざしてベースキャンプまで下山する。すでに昨年5月、テスト登頂と山頂でのトーチ点火に成功しており、天候さえ安定すれば、計画は順調に終える予定だ。

この国家的プロジェクトを成功させるため、中国政府はチヨモランマの北側からの登攀を5月10日まで禁止した。ネパール側からの隊も4月いっぱいには行動できるのが7300mの第3キャンプまでで、上部の登攀はやはり5月10日以後ねらうことになる。

「3月10日」に起きたこと

チヨモランマの聖火リレーそのものは、順調に進行するだろう。しかし、3月24日にアテネで採火され、中国をスタート地点にカザフスタン、イスタンブール、サンクトペテルブルグと運ばれた本来のトーチの進路は難航した。欧州

に入ると最初のロンドンで妨害を受け、8日のパリでは、相次ぐ体当たり攻撃に数キロ走った後は、ランナーともどもバスで輸送されてしまった。大西洋を越えて10日アメリカ西海岸のサンフランシスコに上陸した際も、大々的な抗議デモの洗礼を受けた。

4月半ば現在、問題は北京もチヨモランマも飛び越えてまったく別のシベリアなものになりつつある。全世界からチベットの人々の闘いに共感するメッセージが発信され、各国で始まった聖火リレーは、こことごく妨害に遭っているのだ。チベット人たちが3月に行動を起こした背景として、チベット現代史で「3月10日」が意味するものを理解しなければならぬ。

「3月10日」は、以下のような経緯で「特別な日」になった。

1949年10月、中国共産党軍は中国全土を掌握、チベットが中国の一部である、と宣言、外国の帝国主義勢力から解放するため人民解放軍がチベットめざして進駐する、と発表した。これに対し、チベット政府は「中国とチベットの関係は施主とラマとの関係であり、チベットが中国の一部であつ



ベースキャンプに近い、1980年当時のロンブク僧院 (筆者撮影)

たことは一度もない」と抗議したが、1951年には解放軍が東チベットのチャムド(昌都)に侵攻、ラサにも2万の兵が侵攻した。

これに対し、カム(東チベット一帯)とアムド(青海省一帯)のチベット人たちは山に入り、ゲリラ活動に身を投じた。カムの人々は「国家防衛義勇軍」と称する軍を組織、1958年までにチベットの戦闘力は増大した。しかし、それ以上に中国解放軍は勢力を増強し、緊張が高まっていくなかで1959年を迎えた。

1959年2月、ラサに進駐していた中国当局がダライ・ラマ14

世を観劇に招待した。その際、護衛なしでひとり解放軍司令部に来てほしい、とダライ・ラマの護衛隊長に伝えられたことがチベット政府内で議論的となった。法王がひとり解放軍司令部に招待されたことはラサ市民の間にたちまち広まり、チベット人たちは騒然とした。ダライ・ラマが誘拐されるものと思いいこんだのである。

その結果、ダライ・ラマが司令部を訪れる予定だった3月10日、3万人の市民がノル布林カ宮殿を取り囲み、一触即発の状況となった。「ラサ蜂起」と後に呼ばれる抗議行動がこれであった。23歳のダライ・ラマ14世は衝突を回避しようとして懐柔に努めたが、緊張は増大し、衝突は時間の問題だった。この状況を見て3月17日夜、ついにダライ・ラマは一兵卒に変装してラサを離れた。

チヨモランマに初めて入った日本山岳会隊

以後、毎年3月10日が来るたびにチベット人たちは「ラサ蜂起」を記念してダライ・ラマのメッセージを聞き、集会を開くのである。今年も3月10日にはラサで僧侶を

含む数百人規模のデモが組織された。当局が素早く制圧したため、重大な事態としては世界に伝えられなかったが、14日になってから僧や市民による激しい抗議行動が始まり、各地に飛び火した。

国を消され、さらに固有の文化も抹殺されようとしている人々が、「3月10日」のチベット蜂起49周年の記念日に、国際世論に訴えるにはこの時しかない、と命がけで行動に出たのだ。その意志を応援したいと思う各国のボランティアたちがチベット人たちを支持してさまざまな抗議行動を展開した。この動きは8月の北京オリンピックの日まで何らかのかたちで続くのではない。

文化大革命の混乱と恐怖の時期を経た1970年代末、中国は初めて外国にチベットを開放した。先陣を切って日本山岳会がチヨモランマの登山許可を得、79年には偵察隊がチベットに入った。自分の属する新聞社が後援することになったため、筆者も80年の本隊に報道として参加させてもらったが、チベットの人と風土には圧倒された。

今と違ってホテルなどなく、ラ

サの「招待所」と呼ばれる宿に泊まったのも懐かしい。バスやトラックで一気にはベースキャンプまで入ってしまうのを体験してほんとうに驚いた。文革の破壊行為の傷跡があちこちに無残に姿をさらし、有名なロンブク僧院は、瓦礫の中に崩壊していた。荒涼とした風景ではあったが、ラサのジョカン寺周辺の露店や巡礼たちは活気にあふれ、やはりチベット人の世界は魅力的だった。チベットの文化はしぶとく生き残っている、と感じたものである。

隊の公式記録『チヨモランマ・チベット 日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告書』(講談社刊)には、登攀記録だけでなく、チベットのルポ、歴史や文化などの記述が多めに収録されているのは、そのことをぜひ伝えなかったからだ。

河口慧海、能海寛ら百年前の先達の足跡をたどればわかるように、日本とチベットとの出会いには結構密な歴史がある。仏教を大事にしてきた仲間でもある。チベットの文化を消してはならない。

「天空列車」に乗っても、チベット人が大事にしてきたものに目を向け、深く考えてほしい。

委員会紹介

公益活動を重視した07年の指導委員会

昨年9月号に「最近の遭難と登山者の自立」を書かせていただき、そのなかで指導委員会の試みと公益活動についての概要を述べたので、ここでは、この1年間を通じて委員会が行なってきたことをもう少し詳しく報告したい。

公益活動と会員サービス

指導委員会は、ここ数年にわたり、非会員を対象とした机上と実地講習会を行なってきた。この2008年度も少ない活動予算を工面しながら公益的活動を重視していく考えである。一方「もっと会員サービスへ目を向け、会員向け講習もやってほしい」との声もいただいている。いずれにしろ、指導委員会の公益的活動が、公益法人制度改革法の下で、その認定基準適合の要素の一つになればいいと考えている。とはいえ、当委員会だけが先走っていても公益社団法人化は困難ともいえるだろう。この際、全会一丸となつて、困難といわれる高いハードルを乗り越

えてゆくべきではないだろうか。

この1年間の主な活動

①8月8日、シンポジウム「高所登山における突然死を考える」

海外公募登山隊等における超高所での死亡事例に関するシンポジウムで、医療委員会と海外委員会との共催で開催された。出席者は約200名。高所経験者の多い本会ならではの活発な討論が行なわれた。

②11月6日、講演会「雪山救助現場の実際」

長野県警山岳救助隊副隊長の柄澤良一氏を講師に招き、後に述べるバックカントリイ(BC)滑走者に対する机上セミナーの一環として開催した。臨場感溢れるDVD映像と実体験をふまえた講演に出席者は真剣な眼差しだった。非会員の山スキーヤーやスノーボーダー、約100名が出席した。年齢層も20代から30代が多く、本会イベントとしては特異な雰囲気だったが、出席者のほとんどが、ピ

ーコンを保有しており、その意識の高さにも驚かされた。

③12月8日、救急救命法講習会

当委員会委員でもある恵秀彦氏が講師となり、非会員35名が出席し、半日講習を行なった。内容は、ケガの危険と応急手当、骨・関節・筋肉のケガ、スプリント(副木)のあて方、低体温症・搬送など、パワーポイントを用いながら、より実践的に行なった。ここで学んだことは2月の実地講習会でさらに磨きをかけることになる。

④1月16日、ロープワーク講習会

当委員会委員で、プロガイドでもある棚橋靖氏を講師として開催した。非会員36名が日ごろなじみの少ないロープにふれ、各種結節法(8の字結び、クロープヒッチ、 Munter ヒッチ、クレムハイス、マッシャー、プルージックなど)や負傷者の梱包、搬送などを学んだ。

⑤2月23日、24日、実地講習(雪崩対策及びセルフレスキュー講習)

この講習会は、次ページに田畑委員が報告している、バックカントリイ(BC)講習会のまとめとなる実地講習会であり、新潟の関温泉スキー場で開催された。②か

ら④までの机上講習会に出席した非会員36名を対象としたもの。主任講師は棚橋靖氏がつとめ、富山在住のプロガイド稲葉英樹氏を含めて、指導委員と補助員で総勢13名のスタッフが参加した。講習内容は、ピットチェック、ビーコン、プローブ、シャベル、救出、梱包、搬送、ロープワーク、パーティシップ、読図と多岐にわたる充実したものだ。

1年間の振り返り

このようにして、指導委員会は、非会員のBC滑走者を主な対象とした講習会を行なってきたわけだが、年間の委員会予算は19万円だから、これですべての経費がまかなえるわけではない。講師は、本会会員とはいえプロガイドである。それも学生部出身で「山で身を立てる」と決心した頼もしい連中なのだ。出身山岳部も違う委員たちが先輩面して、「おい、ただ働きしてくれよ」などと、まさに筋違いのことなど言える訳がないのである。そこで、指導委員会では、各イベントは受益者負担に重点をおき、参加者には十分な付加価値を感じてもらえるよう内容も工夫し

て参加費を徴収してきた。

結果、年度末には決して多くはない委員会予算を活用して、「室内クライミングボード・ロープワーク特別仕様」を購入することまでできるようになった。このボードは市販のものを特注し、通常の110度面に加えて裏側の80度斜面にも立ちこめるようにしたため、流動分散や懸垂下降姿勢なども練習できるものである。ボードは組み立て式なので、常時自立ではないのが残念だが、いずれはルーム内で会員がいつでも利用できるような環境にしたいものである。

冒頭でもふれたが、直面している公益社団法人化への挑戦が、高齢化の進む本会にとって、あらたなチャレンジ精神を奮い起こすチャンスになればと思っている。大きな壁も小さなホールドをつかみつづけることで越えることができるのだから。

(黒川 恵)

バックカントリー講習会

昨年と今年で延べ50数名のバックカントリー(以下BC)滑走者に対し「山岳滑走でのセーフティ」という側面からの講習会を指導委

員会が開催するにあたり、専門シヨップ、ボトムラインがその企画と広報に関して全面的に協力したことは極めて重要な点である。

これまでガイドツアーあるいは友人同士で深雪滑走を楽しむために雪山に入っていた本講習会の参加者たちの多くが、滑走技術は高いものの安全面への認識が不十分な上、ほとんどが山岳会などとの接点もなかった。これがゲレンデ・スキーから派生したBC滑走者の現状である。山岳会とBC滑走者との間には大きな壁がある。従来からの山岳会の姿に、彼らは興味を示さない。だがBC滑走の魅力



実際に搬送の講習を受ける参加者

を追いかけるあまり疎かになりがちな彼らの山における「安全面への意識」を考えると、何はともあれ日本山岳会は貴重な存在となり得るのだ。日本山岳会の持つ質の高い人的財産及びネットワークを最大限に活用できるのである。これは結果として「公益法人」としての活動にも繋がるものでもある。

2007年度の講習内容は、前掲の活動報告にあるように、長野県警山岳救助隊副隊長の講演に始まり、救急救命法(室内講習)、ロープワーク(室内講習)と進み、そこに雪崩対策、救出と搬送を加えて総合したもの、最終回の関温泉スキー場における1泊2日の雪上講習である。

個々の講習内容については割愛するが、救急救命法もロープワークも多くの参加者にとって未知の領域だったことは確かだ。なにしろロープやスリング、そしてカラビナにさわったことすらなかったのだから……。

では参加した後の彼らの認識はというと、講習会を境にして以前より「無理をしなくなった」という点にある。多くの参加者からこの言葉を聞いた。一緒に行く仲間

にしても、誰も彼もではなく、装備や知識、そしてその人の経験などから選ぶようになり、講習会未参加の友人などへは講習会への参加を積極的に勧めるようになった。また講習会で身につけた技術によってより危険な山城へ足を延ばすのではなく、逆に以前より一歩手前で引き返すようになった。周囲の仲間に、BC滑走の楽しさと同時に「雪山には危険が多い」ことを自分の言葉で伝え始めたのである。

これは大きな変化であり、いわば「点から線に」繋がったと言える。自分に「何が足りないか」を知り、リスクの少ない領域を適時選択し滑走するようになったのだ。一概に「講習会を受けた」より危険度の高い(より魅力的な)エリアへの進出」ではないのである。穏やかな日の「まささらな深雪」は危険を微塵も感じさせない。そこを滑走し快楽を覚えれば、また再び足を運び、繰り返すうちに徐々に事故発生という臨界点に限りなく接近してゆく。しかし、従来その危険を認識する「ものさし」すら彼らにはなかったのである。当たり前だが雪崩のみではなく山

には様々な危険がある。だがこれら危険を声高に言葉で発しても何も伝わらない。毎冬、事故は繰り返されている。これから根気強く伝えてゆく必要があるだろう。

＊

最後に、単語というものは文脈の中で初めて意味を成す。うまく伝わっていないとすれば、時に文脈すらも疑う必要があるだろう。何のことかという、最初に述べたように、日本山岳会（あるいは他団体）といわゆるBC滑走者との間にある大きな壁である。これは単に世代間のギャップだけではないのではないか、ということだ。接点がなかったのは、同じ山にしながら、それぞれの文脈が異なっていた可能性すらも考えられるからだ。そんなことを思うと、本講習会を運営するなかで、山（雪山）に関して新たな視点からの広い交流が生まれる可能性をひしひしと感じることができるのである。

講習模様は、以下のブログを参照してほしい。

<http://workshop.bottomline.jp/>

(田畑智之)

東西南北

カイルラス山は未踏峰のまま残れるか

鈴木正規

世界の屋根の未踏峰は21世紀まで残されるだろうか。ヒマラヤの未踏の高峰は残り少なくなった。

8000^{メートル}峰14座は1964年までに登り尽くされ、7000^{メートル}峰も次々と登られた。残るのはあとせいぜい2峰ほどにすぎない。ヒマラヤの最後の輝きを消すまいと必死に抵抗する秘峰に、今年も各国隊がしのぎを削っている。

こうした状況から、地球上の初登頂時代はここ2、3年で終わることはなさそうだ。なぜならば、7000^{メートル}級の未踏峰がなくなっても、6000^{メートル}級の未踏峰がまだ3000峰以上も残っているからだ。また、5000^{メートル}級の山となると星の数ほど残っている。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

中国の東部チベットから雲南省にかけて白銀の山並みが連なる。どの山の名前を尋ねても地元民からは一様に「カン、カン」（白い山）という言葉が返ってくる。つまりは無名峰ばかりなのだ。こうした未探検地域は他にも多く、探検登山の楽しみは尽きない。

無数にある6000^{メートル}級の未踏峰のなかで永久に残りそうな山にチベット最奥に聳えるカン・リンポチエ、6638^{メートル}がある。山名「カン」はチベット語で（雪山）、「リンポチエ」は（尊者）で（尊い雪山）という意味になる。古くからサンスクリット語で「カイルラス」と呼んでいる。

現在も巡礼者が絶えないが、ボン教徒はカイルスの左回り、チベット教徒とヒンドゥー教徒は右回りで山を一周する。カイルスの南から見る山容は、上部が純白の氷壁で全体は鋭いドーム状になって

いる。中央部に、頂上直下から深い溝が基部に向かって走っていて、北側から上部は垂直の氷雪壁となっている独立峰である。

チベット教徒とヒンドゥー教徒が（尊い雪の山）と崇拝する聖山だから、信者たちは3000^{メートル}も歩いて巡礼に訪れる。体を大地に投げ出して祈る「五体投地」を繰り返しながら、カイルスの周囲を巡る苦行は千数百年前から続いている。

この秘峰を登ろうとした登山隊はこれまではない。ヒマラヤでは無許可登山がよくあるそうだが、カイルス山に限っては安泰だと思われる。

明治四十年 柴崎測量官の劔岳登頂日

五十嶋一晃

日本の登山史に関心をもっている人びとの間では、柴崎測量官自身が劔岳へ登ったのであろうか、という疑問がつきまとい、よく話題になる。

柴崎芳太郎は職務に精励し、多

くの成果を上げた高名な測量官であり、日本山岳会に愛敬の念をもっていた会員でもあった。その柴崎測量官の登頂に疑問をもつことが、疑問が拭いきれないままの状態がいままで続いていた。

私自身も『山岳』の第三年第三号(明治41年発行)から第六年第二号(明治44年発行)に至る剣岳登頂者論争には興味を抱き、『山岳』第六年第一号に柴崎芳太郎が「第二回に測夫木山を率ひて、自から登山し、以て四號(筆者注・資料は四等)三角點の建標を建設することに決定したり、登山の事實は、夫れ只此くの如きのみ」と記した唯一の記述、あるいは長男・柴崎芳博氏の記述したいくつもの文献を幾度も読み返したが、登頂日や経路などが判明せず、疑問が解けないまま今日に至った。

* 測量に携わる関係者の間でも、いつ登頂したのであるかという疑問を密かに抱いていた人もいた。2009年、新田次郎の小説『剣岳 点の記』が、映画になって上映される。

この小説は山岳文献を基にした

フィクションであって事実とは異なるが、山岳映画であり、立山・剣岳における真摯なロケの状況を仄聞しているので、鑑賞する楽しみが膨らんでいる。

小説では、創立3年目に入った日本山岳会の会員が、剣岳の初登頂を狙っている模様を織り交ぜ、陸地測量部三角科第四班付陸地測量手・柴崎芳太郎一行が、測量という仕事への誇りと、陸軍省参謀本部陸地測量部の威信にかけて剣岳へ挑み、初登頂を成し遂げる物語である。

映画の制作過程で、木村大作監督以下十余名のスタッフが、国土地理院を交互に何度も訪れ、宮本純一測量成果係長らと資料を点検している折りに、柴崎測量官自身、明治40年7月28日に剣岳へ登った資料を確認した。

柴崎測量官自身が登頂した記録は、「明治四十年 越中国 三等三角測量観測手簿 第五三七部」の「四等観測高程手簿」に、目標設置日が明治40年7月28日、また「富山 測量標原簿 三角點之部」の「測量標原簿」には、目標設置場所選定日が明治40年7月13日であることが記載されていた。

今まで発表されている情報と、今回の記録を合わせて整理すると、測量のため第1回目の登頂は、7月13日、現在の長次郎谷から、測夫の生田信と人夫4人が登り、第2回目の登頂は、7月28日に柴崎芳太郎と測夫の木山竹吉および人夫たちが登った、ということが明らかになった。

当時の作業規程である三角測量法式草案(明治34年4月30日発行)に「凡テ観測ノ場所ニ於イテ直ニ為スヘキモノトス」と載っており、2007年10月に「剣岳に三角點を！」を著した元国土地理院北陸地方測量部部長の山田明氏は「測量は全て現場主義で、そのため万年筆で青色のインクを使うことが義務づけられていた。その理由は青色の濃淡で後で書き加えたものであるかがわかるからである。そして測量の観測現場には測量官と測手がいて、メモに書いて後で適当に転写するようなことが測手にわかれれば、即測量官としての生命がなくなる。測量官が測量官であるための最低の矜持である。ただし、選点については、必ずしも測量官が現場にいる必要がない」と説く。したがってこの四等観測高

程手簿は、剣岳の頂上で柴崎測量官自身が書いたことを証明している。

詳しくは、柴崎測量官の登頂とともに、剣岳を巡る錫杖や槍の鑑定結果、宇治長次郎の登頂、表記文字の変遷と統一、標高表記の変遷と確定、疑問に思ふ呼称などを合わせて取りまとめ、別の機会に発表したい。

アンデスを代表する華麗な氷峰群をめぐる内容充実トレッキング

アンデス・プランカ山群 トレッキング 11日間

●5/30(金)発 ●6/20(金)発 ●7/4(金)発
●8/29(金)発 ●9/16(火)発 東京発着
420,000円～428,000円

国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 ⑤ボンド保証合員
アルパインツアサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

もうひとつの白頭山

井上 佑

白頭山といえば、京大の極地法登山が知られているが、先の太平洋戦争で敗色濃厚になったころ、2回にわたり学術調査登山をした隊があった。城山正三がその中心人物であるが、世間ではあまり知られていない。

城山正三は、富山県宇奈月に生まれた。のちに農林省水産講習所(現・海洋大学)助手として、雲鷹丸で北洋調査、樺太の山に登り、千島列島の高山植物を採集、カムチャツカに上陸し漁業基地を視察、最高峰のクリチエフスカヤの探検登山に意欲を燃やす。のちに筑紫山岳会に託したが、実現しなかった。昭和3年、「ツンドラの国」を『改造』新年号に寄稿した。

下関の日本漁網に研究室長として招かれ、昭和5年、下関山岳会の創立を主導した。昭和8年、『山と溪谷』3月号に「カムチャツカの山岳」を発表。

昭和9年、台湾基隆へ赴任。台湾の主要山岳に登り、創立間もな

い台湾山岳会の友人の紹介で、日本山岳会に入会した。会員番号は1509番。台湾山岳自然科学総合研究隊を組織するべく準備するが、召集で台湾の陸軍に入隊した。除隊後、下関から東京に移った本社に勤務。

昭和15年、朝鮮漁網の常務として京城に赴任。「歩け歩け運動」を提唱し、在朝鮮の岳人に受け入れられ、朝鮮総督府の支持も受け、全朝鮮の運動に広がる。これを機に、城山は白頭山研究登山を計画し、朝鮮総督府も支援を約束した。昭和17年7月23日から8月7日まで、第一次探究登山を行なう。75名が参加した。

第二次探究登山は、昭和18年7月24日から8月6日まで、85名で実施。両隊ともに、輸送隊員に朝鮮人を採用し金日成抗日ゲリラの襲撃を避けた。城山が隊長で、朝鮮山岳会の飯山達夫が副隊長格で参加、医学班、文化班、湖沼班、気象班、動物班、植物班、農林班、地学班の各分野で貴重な成果を収めた。その結果を『白頭山特輯』として発表した。

昭和19年に再召集され、陸軍輸送艦(SB艇)艇長中隊長として

広島宇品と朝鮮、台湾を往航。宇品帰港直後、原爆に遭遇、直ちに市内の救護に当たり、白血病にかかってしまう。

昭和45年に『秘境白頭山天池』(叢文社)を発行した。これは『白頭山特輯』が、軍事体制下での不本意なものであったので、戦災で失われた資料も多大であったが、残ったもので編集したものである。65年前のことではあるが、歴史のひとつとして留めておきたい。

三角点の向きについて

古市 進

地形測量の基準点であった三角点標石(文字面)の向きは原則として南を向いているが、三割弱の例外もあるとの主旨を、以前この『東西南北』欄に載せていただいたことがある(『山』564号、1992年5月)。その後、同様な主旨の論考が、水野公男会員によつて本欄に寄せられている(『山』629号、1997年10月)。いずれも实地に観察した統計結果が付されている、互いに補完しあう内容に

ペルーの遺跡と白い山々、魅力を満載したアンデストレックの決定版

白い山群
コルディエラ ブランカトレックと
クスコ、マチュピチュ
そしてナスカの地上絵

15日間
5月24日(土)～6月7日(土)
6月21日(土)～7月5日(土)

¥674,000

ATLAS TREK 株式会社
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

なっている。しかしながら、三角点の総数(三等以上で3万8000余)に対して、いずれの場合もサンプル数が数百程度であつて、十分な統計精度とは言えなかった。それで確認数がもう少し増えた時点で追加をしたいと考えてきた。このほど、その数が10000例に到達したのを機会に補足させていただくことにした。

このようなことを考えるに至った背景については簡単ながら前回記しておいたので、今回は統計表を示すにとどめる。方向の分類は前回の方式に準拠し、比較のため

三角点標石の向き

	古市(前回)	水野	古市(今回)
サンプル数	411	525	1000
東	25(6.1%)	7 (1.3%)	38(3.8%)
南	294(71.5%)	376(71.6%)	721(72.1%)
西	19(4.6%)	18(3.4%)	49(4.9%)
北	33(8.0%)	61(11.6%)	75(7.5%)
その他	40(9.7%)	63(12.0%)	117(11.7%)

に前回の数値と水野会員の結果も併記した。水野会員の原数値は私の分類よりも細かく分けられているので、私の方式に準じて整理しなおしてある。

一見したところ、今回南向きの割合はわずかに増加しているが、大勢に影響するほどではない。南以外の部分ではある程度の変化が見られるが、少数例ゆえの不安定さであろう。ただし、単なる統計的揺らぎだけではなく、一部で地域的な偏りも関係するような感觸も受けている。その点私の場合、居住地の関係で関東甲信越の比重が高いことによるバイアスはあるかもしれない。

ともあれ南向きに関するかぎり、

今回の数値は十分安定したものであると判断している。なにかの参考にしていただければ幸いである。

韓国山岳会の英語表記はなぜ「CAC」なのか

CAC総務理事・曹東植

2月号の「日中韓学生交流登山開催」の記事で、韓国山岳会(CAC)としたところ(KAC)の間違いではないかという問い合わせが何件か寄せられたという。なぜ「CAC」なのか、以下のような理由による。

韓国山岳会の起源は1945年、終戦直後の9月15日にさかのぼる。創立時の名前は「朝鮮山岳会」で、朝鮮の「CHOSEN」と英語表記として一般的だった「COREA」のイニシアル「C」を用いて「CAC」と決めたようである。設立当時、朝鮮半島は南と北の問題などで、正式に国家・政府が成立するまでには3年かかってしまった。

1948年、大韓民国の成立後、山岳会の名称は、改めて、正式に「韓国山岳会」となったが、英語表

記は「COREAN ALPINE CLUB」として残し、創立時からの伝統とプライドを守り続けている。

NASO GOLDEN AWARD 2009 受賞状

熊谷義信

2006年、日本とネパールの国交樹立50周年の記念行事が数多く両国で展開された。しかし、ネパールの政情が不安定な現状から政府の記念行事はなく、民間主導のものが多かった。

その一つの行事として、元在日ネパール大使であったDr.NEPAI氏が主宰している「NATIONAL SOCIETY FOR NEPEAL-JAPAN FRIENDSHIP AND COOPERATION (NASO)」が、ネパールを代表して次の各氏に賞を授与した。

この度受賞した日本山岳会会員は、川喜田二郎、大森弘一郎、故・橋本龍太郎、宮原魏氏の4名である。川喜田・大森・橋本各氏は、非職業上行為でネパールに大きな貢献をされた業績が評価されたということだ。宮原氏は長年ネパー

ルにおいて仕事をし、これからも多くの期待をされているということが評価されての受賞となった。なお、この賞の第1回受賞者は、故・河口慧海氏である。

07年2月26日、カトマンズに各界の要人が集まり、授賞式典が盛大に執り行なわれた。式典には、故・橋本氏の長男である龍氏、川喜田氏の代理としてご夫人、大森氏ご本人が出席された。

なお、この式典のための旅費ならびにネパールで1番の豪華ホテル「DWARIKA」の滞在費などは、「NASO」が負担してくれた。

日本山岳会創立100周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会 編

菊判/1992頁/18900円/クロス装 カバー掛け 函入

今世紀最新・最大の山岳事典。写真や地図をふんだんに使った登路図の解説から、山名の由来、山の信仰や歴史・民俗まで詳しく紹介する。

※日本山岳会の方は直接お申込みください。会員特別割引有り。

〒606-8161京都市左京区
一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111
FAX.075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

コジウスコ登山

1月10日から17日、オーストラリア最高峰のコジウスコ(2228^{メートル})登山に参加。シドニー、キャンベラ市内を観光し、ブルーマウンテン、コジウスコ山をトレッキングした。

世界自然遺産のブルーマウンテンは、ユーカリから発散される油分が太陽光線に当たりブルーの霞になる事に起因している。断崖絶壁に囲まれ幾つもの渓谷から成り立っており、見所満載の景観である。悠久な地球の営みを感じる。エコポイントからの伝説のスリシスターズの岩峰は自然の驚異である。トロッコ車は最大52度の斜面を一気に下り、スリルを満喫する。植生はシダ類が多く、ユーカリは500種との事。茶、ミントなど香りのする固有種の樹木を

観察する。

断崖絶壁の中腹に造られたトレッキングコースを回る。原住民が狩猟時に生活した跡、オーバーハングの岩、滝、植物の鑑賞、急階段を昇り滝の上部を徒渉し、落差160^{メートル}の滝の全景を眺望する。3時間ほどのトレッキングであったが、変化に富んだ、自然の織り成すダイナミックな景観を肌で感じる。このような所にルートを作り拓いた人間の力にも感服する。

今回のメインはコジウスコ山登頂だ。冬はスキー場となるスレドボ。4人乗りゴンドラで1370^{メートル}から1930^{メートル}地点のクラックトンバックタミナルへ一気に登る。銅製のメッシュが敷かれていて歩きやすい。早速、スノーデージー、ビリーボタンなどの花々が「ウェルカム・ツー・オーストラリア」と我われを歓迎してくれる。大陸の空気を思う存分吸い込む。左に



大陸の壮大さを体感したコジウスコ山頂で

湖、窪地に残雪を見送る。

休憩地点のローソンパスの新しいトイレは自然と一体となっており、環境に配慮した造りである。逆時計まわりに360度巻いてコジウスコ山頂に到達。

オーストラリア大陸最高峰で、花崗岩質から成っている。山頂は岩がゴロゴロしている。360度遮るものもなく、なだらかな山々のうねりが果てしなく続き大陸の壮大さを感じる。ガイドの黒沢さん手作りのおにぎりを頬張り、感激のランチタイム。

下りはローソンパスより尾根筋を歩く。至る所に花々は咲き誇り、その都度カメラの放列ができる。

「私も撮って」と花々が囁いているようだ。青空の下、左にアルピナ湖、斜面に満開の花は絵になる風景である。コジウスコ山を遠望し、ブルーレイク湖を見、徒渉してシロツテパスに到着。19^時、8時間余りのトレッキングであった。

(平井康司)

自然保護・科学委員会共催

山岳環境講演会

さる2月2日、日本山岳会ルームにおいて、地球温暖化に関する「山岳環境講演会」が開催された。演題は「地球温暖化とヒマラヤ氷河湖のリアルタイムモニタリング計画」、演者は慶応大学教授福井弘道氏にお願いした(他に小嶋尚氏、西田進氏による関連講演があった)。参加者は55名、熱気のある質疑が交わされた。

福井教授の講演では、地球の温暖化によってヒマラヤの氷河が後退し、氷河湖の拡大が加速されており、モレーンが崩れて決壊すると流域住民、登山者に甚大な被害が生じる恐れがあるという。昨年、福井研究室ではエヴェレスト山麓、イムジャ氷河湖にビデオカメラを

設置、ITによってリアルタイム・モニターが出来る環境を作った。今年はモニターの修復、イムジャ氷河湖の測量と貯水量の確定、緊急警報ネットワークを作り上げることをテーマに再度ヒマラヤを訪れる。モニターするだけではなく、なんらかの対策というエンジニアリングの考えも必要であると話された。

氷河湖決壊対策研究会は、福井教授の所属する慶応大学グローバルセキュリティ研究所のみならず、宇宙開発機構、名古屋大学地球水循環研究センター、国土交通省、国際協力機構、三井金属資源開発(株)、土木研究所水災害・リスクマネージメント国際センターなどの協力による。

日本山岳会では自然保護委員会、科学委員会の共催にて、福井研究室とジョイントして、イムジャ氷河湖下流域の人口調査、洪水による建造物の危険性、警報装置に関する住民の要望など測量と聞き取り調査を行ない、ハザードマップを作成するための環境調査トレッキング隊を、4月23日出発、5月13日帰国の第1隊17名と、4月25日出発、5月15日帰国の第2隊7

名を同地に派遣する。本調査の結果は福井研究室のプロジェクトを間接的に支援するものとなるであろう。

(箕岡三穂)

アルパインスキークラブー

山スキーヤーのための雪崩講習会

恒例の講習会を2月2日～3日、早大ヒュッテ(梅池高原神ノ田圃)周辺で実施した。

最近の山スキーヤーは、厳冬期に深雪を求めて、より高く、より深く山に踏み込む傾向がある。中



雪の降りしきるなかでブローピングの訓練をする

高年が多数を占めるアルパインスキークラブだが、雪崩地帯に身をさらす危険な集団といえる。こうした人たちには、雪崩の知識やセルフレスキューの訓練は必須事項である。

2003年に指導委員会の支援でフィールド講習会を始めて、今年で5回目になる。最近、山岳会の会員、会員外からも広く参加者を募集している。今回は京大山岳部員3名が参加した。受講生10名に、NPO法人日本雪崩ネットワークの講師2名と、充実した布陣である。

初日は、雪崩地形の見かたと対処方法、積雪層の構造・強度の観察とコンプレッションテストの練習、ビーコントレーニングを実施した。宿舎に帰って、雪崩の危険と行動判断などの室内講義。夕食後は、10代から70代までの受講生は映像を観ながら、積雪安定評価方法と実戦的なルートファイディングについて夜遅くまで熱心な討議を続けた。

翌日は昨夜からの新雪もあり、積雪評価に力がこもる。早大ヒュッテ裏のひよどり峰の稜線を目指し、急斜面で積雪層の構造観察・

評価の復習をした。ヒュッテ近くの雪原で、前日の座学での手順に従って、雪崩事故を想定した本格的なレスキュー訓練を繰り返してから下山した。宿舎に戻って本日の積雪安定評価のシートを記入し、全体講評の後、解散した。

この日の夕方、折しも梅池スキー場内で、雪崩死亡事故が発生した。

(松澤節夫)



ネパール ドルポ・トレッキング14日間
8/10発 ¥568,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北海道支部

イグルーから雪のピラミッドへ

札幌市中央区にある道立近代美術館で「吉村作治の早大エジプト発掘40年展」が開催されるので、前庭に雪のピラミッドを構築できないかという相談を、昨年8月に受け、設計図を書いてみた。

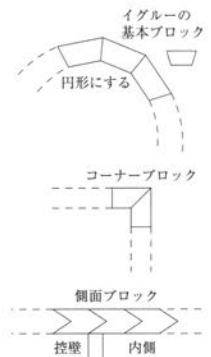
雪のブロックを梯子形に切り出し、横力で円形にし、1段ずつ内側に引き込んで積み上げていく積層式8段イグルーは何回も冬山で作ってきた。その中で生活し、冬山のピークアタックも実施してきたが、ピラミッドは四角錐であるコーナーのブロックは45度にカットした2個を合わせればよいが、問題は長い側面である。バットレス(控壁)を内側に構築してもブロック3個の並列に対して、バットレス1基では弱い。側面ブロックに凸凹を入れて組み合わせ、そ

の上に積むブロックを何枚内側に引き込むことができるか……。

エジプト人の石材作業を研究しているときに、昨年11月23日の上ホロカメットク山雪崩事故で4人死亡の計報が飛び込んできた。雪のピラミッド構想のロマンは吹き飛んでしまった。しかもその4日後の27日、妻が他界し、雪のピラミッド設計図もどこかにいってしまった。

07年12月27日、公益事業委員長の高橋宜也氏とHBC企画事業局の榊原満氏との3人で、どの場所がよいか美術館前庭の下見をする。北海道支部は不死鳥のように少しずつ動き始めなければならないという、マグマのような熱いものがフツフツと突き上げていた。

ピラミッドの中には副葬品を安置する空間があり、その内部の部屋には階段がある。雪のブロックで内部の部屋をまず作り、外側の



平面との間に雪をつめれば、外側のブロックを内側に引き込んでも崩れないだろう。この発想は、5名の葬儀の際、夢に出てきたものであった。

しかし、1月は雪が降らない真冬が続く、札幌雪祭りが終了してから降雪があったが、気温がマインスの日が多く、固い雪のブロックができない。

2月8日、一辺が4分の1の正方形の底面積とし、40個の雪のブロックを置き、さらに2段目を積み上げた。15日、強風雪の寒い日、10名で5段目まで積み上げた。雪のブロックが固く締まっていけないので、内部の部屋を作らないことにし、内側に雪を入れて外観を整えた。16日、強風雪で最も辛い作業日。14名で10段目まで積み上げる。そして2月23日、湿雪と強風であったが、多数の小学生たちと雪のピラミッドを完成させる。

のべ46名の会員・会友の気持ち

が、高さ3メートルのピラミッドな60度の造形に凝縮された。長期間のボランティア活動であったが、昨年の円山動物園でのイグルー作りの第二弾となった。

(新妻 徹)

千葉支部

カルパティア山脈に関する講演会

千葉支部主催の「日本アルプスとカルパティア山脈の山岳景観の比較」と題した講演会が、3月11日、明治大学名誉教授の小嶋尚氏を講師に迎えて行なわれた。

ところで、カルパティア山脈をご存じだろうか。

演題を聞いて、まず地図帳を開いたのは私だけではなかったように、知的好奇心を刺激されて出席した会員で104号室はいっぱいとなり、椅子を急遽追加する盛況であった。

カルパティア山脈は、アルプスの東にポーランド、スロバキア、ウクライナ、ルーマニアにわたってハンガリー盆地を囲むように「つ」の字状に続く全長1600キロの大山脈である。日本アルプスと

ほぼ同じ高さで、ハイマツ帯があり、氷河地形が発達しているが氷河はない、など似た点が多く見られる。しかし、氷河地形やハイマツ帯の規模は大変違う。

カルパティア山脈タトラ山地の水蝕谷は源頭部が複数の圈谷に分かれている。そのため谷頭が幅1〜3^キの扇状に広く開けている。

底の平らな大きな圈谷、急峻な谷壁のU字谷、階段状の谷底、多くの氷河湖が、タトラ山地の氷河地形の特徴である。日本の槍沢や白馬岳大雪溪の氷蝕谷と比較するとその違いがよくわかる。

道のない山には日に30人以上は登らせず、ゴンドラで行く山頂は滞在時間30分、などの規制があり自然保護は徹底している。

その反面、ヨーロッパの山では、森林限界よりも高所では古くから家畜の放牧が行なわれてきたので、高山帯の自然は人為の影響を強く受けている。カルパティア山脈も例外ではない。これに対して日本では、高山の上部を利用することがなかったため、温帯では珍しく高山帯の自然がきれいに残されているという。

美しいそしてめずらしい写真を

見ながらの小嶋氏の丁寧な説明に、多くの会員がぜひ1度この山地を歩いてみたいという感想をもらしていた。

福岡支部

(篠崎 仁)

自然観察会——求菩提山

3月1日、支部恒例の自然観察会を修験道の山、求菩提山で実施した。

求菩提山は福岡県の東部、豊前市の中心部から南西約15^キに聳える標高782^メの円錐型の峰である。西約10^キに著名な英彦山がある。

全国の修験道の山がそうであつ



快晴のもと、求菩提山に集まった自然観察会参加者

たように、この求菩提山も仏教伝来の頃より僧たちの山岳修行の場であったと推察されている。さらに修験道が確立した平安末期から維新の「神仏判然令」まで多くの山伏が住みつき、きびしい修行に励んだ信仰の山でもある。

この日は、西高東低の冬型気圧配置が緩み、久しぶりの快晴となった。23名が乗った貸し切りバスは福岡市天神を出発。途中1名が乗り込み満席となった。求菩提資料館下の駐車場で2名と合流し、参加者26名全員が集結した。

バスの中では筆者が、求菩提山や英彦山の開創が仏教公伝以前に渡来僧によってなされたという伝承の背景にある「豊前」の渡来人の活動について説明。続いて松本顧問から求菩提山とその南の犬ヶ岳(1131^メ)周辺の地形、火山岩類についての講話を受けた。

「行者帰りの道」といわれている杉の人工林の急坂から登り始める。八合目付近に並ぶ五窟の一つ阿弥陀窟を経て、石造りの鳥居をくぐる。やがてこの山の信仰の中心であった天台宗護国寺の跡、現在の国玉神社中宮に着いた。この周辺から山頂部へかけてアカガシやウ

ラジログシなどの自然林が広がっている。中宮の右手から、鬼が一夜にして造ったとされている「鬼の磴」と呼ばれる836段(参加者の一人が数えた)の石段を昇りきると上宮、山頂である。

ここで、早春の日差しを浴びながら昼食をとる。かつては神殿、拝殿の周りを杉などの大樹が囲み、靈氣を感じる薄暗い所であった。しかし、1991年の台風19号により多くの樹木は倒れ、拝殿も倒壊した。かつて靈氣を感じた薄暗い場所は、すっかり明るくなってしまった。下りは胎藏界護摩場跡、五窟を経て登りに通った「行者帰りの道」を下った。

下山後、求菩提資料館や「岩洞窟」と呼ばれている洞窟に立ち寄った。「岩洞窟」では、天井に描かれている「飛天」を観賞した。さらに、昭和の前半に活躍した映画俳優・大河内伝次郎の生家跡にある樹齢200年、高さ25^メにも及ぶコウヨウザン(広葉杉)を見学した。

春到来を感じさせる雲ひとつない青空の下、信仰の山、求菩提山で過ごした、のどかで楽しい一日であった。

(中山 健)

会務報告

平成20年度第11回(3月度)理事会
日時 平成20年3月12日 18時30分～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、齊藤・石橋・古野・太田・相馬・山川・岡部・藤井各理事、深川・竹中各監事、河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長
【委任】 堀井理事
【欠席】 日下田常任評議員

【審議事項】

1・平成20年度事業計画・収支予算案(宮崎・吉永)

総務・財務担当理事からそれぞれ説明があった。収支予算書は今年度から公益法人会計の新しい方式とした。(承認)

2・ヒラリ―卿追悼「講演と映画の夕べ」(神崎)

5月9日(金)、社団法人日本山岳

会主催、海外委員会主管で実施する。

3・転載許可願(宮崎)

松方恭子さんより「妻に送った99枚の絵葉書——父 伊藤愿の滞欧日誌」(松方恭子編)に会報「山」の記事転載願う。(承認)

4・海外登山基金審査報告(変更)(古野)

第10回理事会で承認した登山隊2隊に計画変更があり、審査委員会から計画変更を了承したと報告があった。

(1) G登攀クラブ隊のシシヤパンマ南西壁登山隊は計画中止、助成金辞退。

(2) Himalaya Climbing 2008 隊は目標をナムナニ南東壁からインド・カメット南東壁(未踏)に変更すると届出があり了承、助成金の金額変更なし。(承認)

【報告事項】

1・除籍対象予定者について(吉永)
3月末で会費未納による除籍予定者は61名。

2・第2回夏季研究・観測活動の募集(宮崎)

NPO法人富士山測候所を活用する会で施設利用者を募集している。

3・ヒマラヤンクラブ創立80周年記念行事報告(宮崎)

会長代理もかねて出席した中村保会員より記念行事が盛会に行なわれたとの報告があった。

4・日中韓学生交流登山2008報告(吉永)

2月21日より28日まで白馬山城の梅池高原で行なわれた。悪天候のため計画した登山は出来なかったが、スキーを主として今後につながる有意義な交流が出来た。

5・ルームの清掃作業の再開(宮崎)

本年度当初より業者の都合で中断していた月1回の清掃作業、業者を変更して再開した。

6・支部定期総会への役員派遣依頼(宮崎)

山梨支部創立60周年定期総会が4月12日に開催される。成川常務

理事出席。

7・第11回東海岳人写真展のお知らせ(宮崎)

東海支部で「山と自然のパフォーマンス」が3月18日から開催される。

8・講師派遣のお願い(宮崎)

5月10日(土)開催の東海支部総会での講演者紹介依頼があり、医療委員会上小牧憲寛会員を推薦した。

9・宮城支部創立50周年記念事業兼北海道・東北地区集会の開催について(宮崎)

10月18日(土)～19日(日) 仙台市「ホテル仙台プラザ」において北海道・東北地区集会が開催される。

10・雪上技術講習会報告(古野)

2月23日(土)～24日(日)、妙高・関温泉スキー場で開催された。参加者48名(講師・委員含む)。

11・事務局職員の異動(宮崎)

時田真理さんが3月末で退職に伴い新事務員の募集をする。

12・自然保護アンケートの結果(山川)

アンケートの回答は約1800通の返信が得られた。会員各位の協力に感謝する。集計の結果は自然保護シンポジウムで発表する予定。

13・会報編集報告(神長)

会報「山」3月号編集報告。

ルーム日誌 3月

1日	図書交換会
3日	総務委員会
4日	図書委員会 アルパインス ケッチクラブ
5日	常務理事会 集会委員会
6日	101の会 山岳地理クラブ 学生部 アルパインフォト ビデオクラブ 九五会
10日	アルパインスキークラブ
11日	千葉支部 アルパインスケ ッチクラブ
12日	理事会 指導委員会 山想 倶楽部 休山会
13日	海外委員会 山の自然学研 究会
15日	評議員会
17日	総務委員会 資料映像委員会
18日	山岳研究所運営委員会 ゆ きわり会 JAC00会
19日	アルパインスキークラブ 自然保護委員会 三水会 つくも会
21日	高尾の森づくりの会
24日	アルパインスケッチクラブ
25日	インターネット小委員会

26日	千葉支部 二火会 自然保護委員会 麗山会 アルパインスキークラブ
27日	科学委員会 山遊会
28日	資料映像委員会 学生部
31日	海外委員会 3月来室者605名
会員異動(3月)	
物故	
渡辺立男(8845)	08・3・17
桑原富彦(11650)	08・2・3
河田克己(14378)	08・2・10
退会	
岡村治信(5241)	北九州
三上忠人(5247)	北九州
松尾良文(5402)	福岡
石橋保(5596)	福岡
吉田實(5827)	福岡
稲田定重(5864)	福島
小山長孝(6084)	越後
塩村省三(6143)	北海道
青山義信(6802)	北海道
佐藤静夫(6926)	北海道
小林重一(7397)	秋田
鈴木清(7503)	秋田
佐久間吉信(7541)	福島
宗像清吉(7653)	福島
稲山明子(7909)	福島
吉田三智子(7964)	関西

伊藤文三(8060)	関西
吉村節子(8182)	北海道
新庄久志(8492)	北海道
内山脩一(9162)	北海道
岡本良子(9228)	北海道
河村皆子(9416)	北海道
三瓶泰弘(9514)	福島
西本明子(9868)	京都
堀田昌子(10087)	京都
堀功(10104)	京都
山崎昭男(10597)	山陰
鈴木丈司(10818)	山陰
三嶋規明(11362)	山陰
石井陽子(11561)	山陰
上北睦子(11880)	京都
木内護(12087)	京都
中井桂子(12175)	京都
柴本弘(12336)	山梨
平原守(12497)	山梨
村田逸男(12596)	京都
大久保セツ子(12749)	北海道
澤崎新一(12818)	北海道
長友良子(13026)	宮崎
原田俊子(13066)	宮崎
白川耕太郎(13084)	北海道
秋満信夫(13197)	東九州
荒川直士(13829)	宮崎
内山憲一(13989)	宮崎
俵孝子(14166)	宮崎
池田武治(14294)	東海

図書受入報告(2008年3月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
植村記念財団(編)	植村冒険館15年の歩み——「アドベンチャー・フォーラム」集成版	111pp/30cm	植村記念財団	2008	発行者寄贈
田代博	知って楽しい山岳展望	190pp/19cm	新日本出版社	2007	著者寄贈
鎌田浩毅	富士山噴火——ハザードマップで読み解く「Xデー」(ブルーバックス)	206pp/18cm	講談社	2007	出版社寄贈
NHK取材班	白夜の大岩壁に挑む——クライマー山野井夫妻	253pp/20cm	日本放送出版協会	2008	出版社寄贈
記念事業実行委員会(編)	日本山岳会富山支部創立60周年記念誌	142pp/26cm	日本山岳会富山支部	2008	発行者寄贈
ベルククラブ(編)	十国峠合同登山会(2007)報告書	147pp/26cm	ベルククラブ・日本救急員連盟	2007	発行者寄贈

日本山岳会会員名簿2008年版10月発行のお知らせとお願い 総務委員会

日本山岳会の会員名簿2008年版を、今年の10月15日発行を目指して作成しようと思います。会員各位のご協力をお願いいたします。

当会の会員名簿は2003年12月1日に発行されてからすでに4年余が経過しました。

この間、新たな加入者、物故者、会員の住所移動等が多くあり、さらに市町村の合併や、町名地番の変更もあって、改訂版の発行が強く望まれています。

名簿には従来どおり会員番号、入会年月、住所、電話番号、所属支部を掲載する予定です。ほかに当会の定款、支部設立等に関する規定、支部住所一覧、ルームや図書、上高地山岳研究所の利用規定などを掲載します。会員名簿に登録、記載された情報につきましては、これまでどおり適正な取り扱いを期し、情報の不正な流出、転用を避けるため十分配慮したいと存じます。

お名前の文字や住所、電話番号などにつき、2003年版の名簿や、会報等が郵送される宛名をチェックしていただき、間違いや変更がありましたら、当会の総務委員会または事務局までご連絡ください。

締め切りは9月15日と致しますが、早めにご連絡くださいますようお願い申し上げます。

なお、2008年版の作成に当たって、当会より記載内容確認のためのハガキ等は差し上げませんのでご了承ください。

◆新会員のための企画「徳本峠
えとウェストン祭」
山研運営委員会・信濃支部共催
61回目を迎えるウェストン祭。
昨年の工事で復旧した島々谷から

徳本峠を越えて上高地に入ります。
山研に1泊して、翌日「碑前祭」
に参加。新会員の仲間づくりを手
助けする企画です。
日程 5月31日(土)～6月1日(日)



費用 1万2000円(1泊2食、
午餐会費、記念品、傷害
保険料)

定員 20名(19年度入会の会員、
及び本会会員の希望者)

申込 5月15日までに堀嘉余子ま
でTEL&FAX 03-333031
6922)

*現地集合・解散

*申込者に詳細を送ります。

◆熊野古道・小辺路を行く

集委員会

石楠花の季節に高野山から「小
辺路」を熊野本宮まで歩きます。

日程 5月31日(土)～6月3日(火)
費用 4万7000円(宿泊、懇
親会、語り部、保険など)

定員 20名

集合 5月31日(土)16時
解散 6月3日(火)15時

申込 5月10日までに、ハガキ、
電話、メールなどで米村文
比古まで(☎187-0044小平市喜
平町3-1-6 TEL 0
90-4524-0539

☞breezy@msj.biglobe.ne.jp)

*現地集合、現地解散

*申込者に詳細を送ります。

第10回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について 秩父宮記念山岳賞審査委員会

第10回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦のみ)を
下記の通り受け付けます。事務局まで資料をご請求下
さい。多数の推薦をお待ちしております。

- 対象分野 登山活動
山に関する文化活動
- 提出先 日本山岳会内 秩父宮記念山岳賞事務局
- 締切り 平成20年8月末日

◆土曜懇話会開催

集委員会

宮下秀樹会長をお迎えし、日ご
ろ親しく接する機会の少ない会員
と上高地山研で親交を深めたいと
思います。

日程 6月21日(土)～22日(日)

場所 上高地山研

内容 21日(土)10時から昼食をはさ
んで上高地散策後、15～17
時、宮下会長講演会

費用 6000円(山研利用料・
食費)

定員 20名

申込 5月30日までにファクスか

メールで山崎浩子まで(FAX)

045178218712

✉ y-hiro@f3.so-net.ne.jp

*20日(金)の前泊を希望の方は、申込時にご連絡ください。申込者に詳細を送ります。

◆探索山行参加者募集

科学委員会

「富士山南面を科学する」探索山行を行います。往復、バスを利用します。

日程 6月14日(土)～15日(日)

集合 14日7時15分、新宿駅西口

解散 15日18時30分、新宿駅西口

定員 40名

講師 増澤武弘(静岡大学理学部

教授)、由井将雄(明治大

学付属中・高教諭)、石岡

慎介(会員)

費用 1万8000円(宿泊、往

復のバス代含む)

申込 5月31日までに未廣担まで

2 (FAX) 03-34281680

✉ suehiro5@kdb.biglobe.n

e.jp)

*申込者に詳細を送ります。

◆黒部市で日本登山医学会集会 & シンポジウム

高所医学研究者の研究発表の場である2008年度の日本登山医学会学術集会・第28回日本登山医学シンポジウムが開催される。シンポジウムのテーマは「高所環境の有効利用」と「マウンテンメディカルレスキュー」の2つ。2日目は黒部ルート見学など現地検討会。「登山と健康に関心ある方々の学会参加を」と呼びかけている。

日時 5月31日(土)～6月1日(日)

会場 宇奈月国際会館セレネ

主催 日本登山医学会・実行委

南極地域で登山をするためには 南極環境保護法に基づく手続きが必要です 環境省環境保全対策課

南極大陸最高峰ビンソン・マシフ(4897m)への登山など、南極大陸に上陸して登山を計画している方にお知らせします。

南極環境保護法(平成9年公布、平成11年完全施行)第5条第1項に基づき、南極地域(南緯60度以南)において、科学観測のほか、登山、観光、冒険旅行など、原則すべての活動を行なう場合は、その活動について環境大臣へ申請して、南極地域に与える影響に関わる基準を満たしている旨の「確認」を受ける必要があります。

日本以外の環境保護に関する南極条約議定書締約国において「確認」を受けた活動に参加する人は、同条第3項に基づき、環境大臣への「届出」が必要となります。

南極地域での活動を行なうためには、必ずこの「確認」または「届出」のどちらかの手続きが必要となり、これらの手続きの遺漏等に関わる罰則も定められておりますので、十分ご注意ください。

【連絡先】環境省地球環境局環境保全対策課

〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2

TEL: 03-5521-8245 FAX: 03-3581-3348

✉: antarctic@env.go.jp

詳細は左記ホームページか事務局(黒部市民病院臨床スポーツ医学センター・長崎、金山)TEL 076515412211内線1967)まで。http://210.248.58.194/jsum08/index.html

■訂正とお詫び

3月(754)号、17ページ4段13行「全ルートの75」は「全ルートの75」の誤りでした。訂正して、お詫びします。

◆編集後記

●平成19年度第2回通常総会も終りましたが、今回も出席者に若い人はいませんでした。歴史と伝統がある山岳会ですから、単純に若い人がいればいいというわけではありませんが、公益法人化で重要な時期だけに、ちよつと寂しく思いました。

●北京オリンピックの聖火リレーをめぐる、中国とチベットの対立が浮き彫りになってきました。その背景を江本さんにレポートしてもらいましたが、チベット圏への登山やトレッキングなどで、独自の文化をもったチベットの人たちに魅力を感じた会員も多いと思います。私たちももう少し積極的にこの問題を考えていく必要があるのではないのでしょうか。

(神長幹雄)

日本山岳会報 山 755号

2008年(平成20年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社